
人形

DOLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形

【Nコード】

N3170H

【作者名】

DOLL

【あらすじ】

連於絢中3 自称自他共に認めてます、自己中心的悪条件高揃い超面倒女つす。彼氏いません、好きな男もいません。不特定多数。心の声駄々漏れしますたまに。こんな自称クールな女ありえないやつに恋、します。いや、認めたくねーな。

なんばーわん

心打たれた。今も思う、何であいつなんだ、って。マジで自分が馬鹿だな、って呆れる。

だけど、どうしようもないっていうの？訳わかんない……。あーありえない。

名前連於絢・学年中3・性別女・血液型AかBかO・性格自己中心的生意気超面倒女自称自他共に小悪魔、はい、こんな女ですがなにが？笑最悪条件高揃いですよ。でも、しかたないじゃない、そう育ったんだから。はいはい、影で文句言ってるやつでできなさーい。影で、倍返ししてやるから。……。ってなんだ、この独り言……。超イタイじゃん、。やーめた。閑話休題。えっと、何がしたかったかって言うと、自己紹介。だ。中3でこんな言われようなあたしってどうかしてるよね。でもしょうがない。およ、また脱線しそー、やめやめ。えーっと、じゃあ取り合えずいままでのあたしをどーぞ、なんつって。

「あーやー、おはよー!」

「……うん、はよ」

「テンションひっく!!えっとー、低血圧??だっけ?」

「……ん」

こんな感じで始まるまいすくーるらいふ。舌まわんねー。ってかなに、低血圧って。いつでも絢様は元気っすよー。お前がテンシヨ

ン無駄に高いだけじゃー!!言い忘れてたけどあいつは鷹野瑠貴たかのるき。こいつも面倒な女。でもなんか気があっちゃったりするんだよねー。あれだからかな、あの、小さい頃から何年も一緒にいて家族同然でーす、みたいなえーつと、幼なじみだ。それそれ。むー、とりまそいつの紹介でも。名前省略・学年中3・性別女・血液型O・性格男好き無駄に明るい面倒な女とつるむの嫌い自他「悪魔」っす。

「ちよつとー絢ちゃん、心の声駄々漏れなんですけどー」

「あら、瑠貴ちゃん盗み聞き??良くないわよー」

「わー勝手に漏らしといて何言っちゃってるんですかー」

「つてか語尾のばすの好きね、」

「絢も始めてたっつーの」

「みたいな関係??楽しいよ、そりゃあ。数少ない友達の人ですもの。大事に大事にしていきたいわ。やば、キャラ変形が早い…。まあ、いいとして。この女も多分だけど友達の数少ない。やば、やっぱ幼なじみ??運命かんじるー。その理由をあげるならば男好きが絡んでくる、と思う。でも瑠貴からしたら」

「男好き??まあそれは認める。だけど取ってるわけじゃないんだよ、向こうからくんの!!大体くあたしは中途半端に男と付き合ってる訳じゃないし。本当に本当のあたしの運命の人探してるだけどもん!何か悪いところある??」

「だそーです。何か悪いところ??ない笑他人の意見なんかあたし達には通じない。つてか聞き入れたところで価値ないし。あたし達はほら、自分すべてだからね。でもこんな言葉聴いたら今まで瑠貴がとつてk・・・おつと間違えた。付き合ってきた男の元カノがかわいそー。。。心にも思っただけですけど。」

「絢もめちやくちやに人のこといつてんけど、自分も酷いよ?？」
「は?」

「だってさあー来るもの拒まず飽きたら捨てる、じゃん」

「何それ、初めて聞いたんすけど」

「初めて言ったから」

「……あつそ」

何だ……来るもの拒まず飽きたら捨てる精神は……。そんなもの持ち合わせた覚えなんだけどなあ……。そつかあー瑠貴ちやんおかしいもんね。納得。

「違うよ」

「……また駄々漏れ?？」

「うーん……幼なじみだけに通じる読心術!!みたいな?？」

「……そお。」

「まあとりま、他からみたらその何とか精神丸出しなーの!!」

「へえ」

そーだったんだ。びっくりー。棒読みですいませんね。どう?？そろそろこのキャラになれてくれたかなー!?!?……ありがとうありがとうがとう。

「そーいえばさ、櫻井さんはー?？」

「あーあいつ?、ばいばいした」

「えーもったいないー!!超好条件だったじゃん!!」

「運命感じなかった」

「何いつてんの?？笑絢が運命とか、どーせ飽きたんでしょ?？」

「……んー」

残念だなあー瑠貴がわからないなんて。ほんとだよ??だっておんなのこだもん。誰だ。自問自答??んー自分で言ってるわかんなくなっただぞ。。。泣、うん。でもほんとだよ。多分。悪いけどあいつにはそーゆーの感じなかったんだ。んー??そーゆーのはそーゆーのですよ、奥さん。誰だ。あれ、デジャヴ???

ってかさ、何、この心境。いや、昔も今も大してかわらないよ??だけどさー客観的に自分見ちゃうとつらいつてゆーの?あうーわかんね。でもーこれでわかるよーに、あたしは好条件な男としか付き合わない。だって。。。まーいいや。特に理由、ないし。だつてとかないし。うん。あーやば閑話休題。

この何もなーくとつもなーく暇な日常が(まあちよこーつと変なあたしの心境やころころ移り変わる瑠貴の男はおいときまして)とつぜんかわっちゃうんですな、これが。何キャラだ??わし。まだまだ感じなせたくない今日この頃。さー瑠貴とあーそば。

なんばーっー

なんだ、こいつ。

「お、蓮於、お前また彼氏と別れたんだって?!」

「・・・うん、運命感じなかった」

「笑、お前が運命ってキャラかよ、」

はーいうるさいですよ脇役2人。うーん扱い酷い??はっ、ありえねー。つかまじうざいんですけどー。その前にどっからの情報だー。くそ、めんどくせーなあ。・・・あら、私こんなキャラでしたっけ??・・・まあいいわ。

「だから同級生ってやなのよねー」

「わかるー!!!!!!」

「・・・瑠貴、あんたいつから」

「いま!」

「(馬鹿?)・その割にはよく同級生と付き合ってるんじゃない」

「あれはー運命の人に出会うための準備みたいなもの!あたしの運命の人は年上なの!!」

「あっそ、」

まじでおばかさん。なーにほざいていらっしやるんだか。でもまあ、このあたしが同級生と付き合う、いや、スキにな、りもしない

わ絶対。気になることだつてありえないと思う今日この頃でした。
あれ？作文？

まっくら。思ったことを言ってみた。何となく。まあ夜なんでね。
つか暇。どーしよつかなあゝ瑠貴誘つてみよ。ゝつて無理じゃん！
あのご運命の相手とやらに会いにいつてるんでした泣・・・寂しい
女ってこんな感じかしら。ゝお？最近是谁でも持っていて今のご時
勢小学生までもが持っているという四角い物体から電子音が。つま
りは携帯がメールの受信をつけてるわ。

Receive Mail「001/1000」
Date 06/23 21:17
From@doccomone.jp
Subject 無題

登録お願いします。

おおい!!!誰じゃい!!わかんねーんじゃい、まじで誰じゃて
めーってあらあら、言葉使いがよろしくないわね。気をつけなくて
はおほほ。さて、この意味不明なめーる。どうしようかしら。男か
女かもわからないわね・・・。まあ、返すだけ無駄ね。しかとよし
かと。

Receive Mail「001/1000」
Date 06/23 21:32
From@doccomone.jp

Subject 無題

ごめん、名前いれわすれた汗
堯田っす。よろしくな〜

あらあら。ずいぶんとあたしと打ち解けたようで。何かしらこの生物。いつ心許したのかしら。あたしの心は鉄の格子がはめられてるくらい厳しいのよ。嘘にならないけど。で、どうしたらいいのかしら。この生物。無視してもいいかしらね〜。。。ってあら？？急に睡眠の魔王略して睡魔様が襲ってきたわ。。。ゴメンなさい、山田くんもう寝るわ。

次の日

「あ！蓮於さん、おはよ〜」

誰かしら？？今あたしの前に立ちはだかっている随分と可愛らしい容姿をお持ちの方は。まあ同級の男なんかと話すほど暇ないわ、あたし。(ちよっときどりふう)

「蓮於さん、無視しないでよ〜」

うるさいわね。色素薄いくせに！！おっと、説明不足が発生。この方、色素薄いの。髪とか地毛で茶色だし目も茶色ね〜。羨ましい。

いいえ、負けない！今のこの時代、染めるものなぞいっぱいあるもの！あたし負けないわ！ちなみに背はあたしより、認めたくないけど大きいわね。認めないけど。

「蓮於さん??大丈夫??」

そーいって相手の方はあたしがうつむいてるのを心配してか顔を見ようとかがんできた。(はう、顔がめ、目の前ノノ)・・・なんだこの少女漫画ちつくなせーっ！めー。きも。鳥肌たっちゃうね。きもすぎて。あ、二回いった。()の部分、絶対あたしが言わない、いいえ思ったりもしないだろう言葉ね。自分でいってて変だわ。とりあえず、この男しつこい。

「あーごめん、なに??」

「お、やっと話せた!!昨日めーるしかとしたっしょ??笑」

「めーる・・・??」

ああ。昨日のめーる。この方からだったのね。たしか山田くん。

「もしかしてみてない?」

「いえ、ちゃんと見たわ。」

「よかった!!登録してくれた??」

何かしら、この小動物的な生き物。(今回は生物よ、レベルアップよ山田)

「・・・ええ、したわ」

「じゃあ、これからは気楽にめーるすつから!じゃあ、また後でな」

恋愛してほしいってわけ??無理に決まってるじゃない。あんな青い春な恋愛。

ああ、とつと終わったわ授業という足枷。何故かしら、こんなにもつかれるの!「蓮於さん!!」・・・まあ誰かしらあたしの心のつぶやきを妨害したかた・・・

「山田。。。。」

なんであいつがここにいるのかしら。最悪ね。みんな注目じゃない。・・・しかたない。瑠貴が好奇心溢れる目でみているから。

「、何か御用?」

「蓮於さんと話したいな〜って思ってた!」

「・・・なんで??」

「え、あー前にさ、俺、蓮於さんに助けてもらったことあって、いい人だな〜って思ったからさ!」

「・・・そんなことあったかしら」

「やっぱ忘れてるか汗」

その後山田くんに聞いたお話はこうだった(らしい)先に言うておくわ、ストーリー風に説明します。

風に説明します。

「（いつてー・・・）」
「おい、堯田大丈夫かあ〜???」
「おう、転んだだけだし、洗ってくる」

中2の夏。夏休み中でも部活は休むことなく走り回っている。そのなかでもサッカー部は都大会出場を果たし猛練習中なのだ。

キユ

「（ああーきもちいかも・・・）っし、大丈夫だよな」
（・・・濡れた足、どーしよっかなあ汗、なんかタオル、、ま
あいつかこれで）

「あなた」

「ん??（・・・美人誰だ?）」

「そんな汚いタオルで汚れたところを拭くの??御気は確かかしら??もつと悪化するわよ」

「いや、いまこれしか「はい」「はい?？」」

「これで拭きなさい」

「、え、あ、ありがとう」

「返さなくていいから（それあたしのじゃないし）」

「え、ちよつと」

「じゃあ」

「・・・何かしら、この妄想」

「妄想じゃねえよ!!!笑本当に蓮於さんにハンカチ貰ったの!!!」

「へえ」

残念ね山田。それはあたしのハンカチじゃないわよ。あまり覚えてないけど。あたし過去は振り返らない主義なの。まじで。

「で、そっからいいひとだな、って想って、でも蓮於さん2年のとき階違かったからあまり話せなくて」

まあ、それは光栄ですわ。

「で、やっと隣になったからさ」

そう言って笑う山田くん。少しきゅん（でしたかしら？）としましたわ。それはこいつには内緒の話。これから惚れちゃうかなと想ったのも内緒。

なんばーっー（後書き）

やっちゃったにわめ。。。。

あわわ、どしよ。。。。

こっから不安ばたんきゅー）（古

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3170h/>

人形

2010年10月15日23時36分発行